

		おそれる	こわがる	おびえる
はたらき		感情的判断	感情の表出	感情変化による動作
主 体		判断力のあるもの	感情を有し、その様子を観察できるもの	
補		具体的な補語が必要	場面、状況、環境など漠然としたものでもよい	
語 出 来 事	「～するのを(に)」 「～されるのを(に)」	恐怖の有無、主体が何であるかにかかわらず可	恐怖が生じ、補語の主体と「こわがる」の主体が一致する場合にのみ可	不可
	「～しないかと」 「～されないかと」	恐怖の有無、主体が何であるかにかかわらずやや不自然	恐怖が生じ、補語の主体と主文の主体が一致する場合にやや不自然、それ以外は不可	

言語経歴：1963年2月 北海道小樽市生 0
 歳～5歳 小樽市 5歳～6歳
 有珠郡 6歳～18歳 札幌市 18
 歳～19歳 東京都目黒区 20歳～
 神奈川県川崎市
 (東京都立大学学生)

とおる・すぎる・ぬける

—移動領域との関わりを中心に—

杉 本 武

1. はじめに

本稿で取り上げる三語は、国立国語研究所1964では、「とおる」が「2.152、通過」, 「すぎる」が「2.152、追い・逃げなど」および「2.16 時間・時刻」, 「ぬける」が「2.153、込み」のように、皆別の項目に分類されている。また、3.でもみるように、これら三語を類義語として分析した研究はなく、直感的にもその類義関係は遠いようである。

しかしながら、「とおる」と近い類義関係にある動詞は見出し難い。また、類義関係の近い動詞の比較においては埋没しがちな特徴が、類義関係の遠い動詞との比較によって明らかになることもある。それは、本稿で取り上げる三語について言えば、本稿で明らかになるように、移動領域の性格、あるいは動作と移動領域との関わり方である。これは、具体的には、次のような文の表現効果の違いに現われる。

- (1) 国境の長いトンネルを とおると 雪国だった。
 - (2) 国境の長いトンネルを すぎると 雪国だった。
 - (3) 国境の長いトンネルを ぬけると 雪国だった。
- (3)は川端康成の『雪国』の冒頭であるが、「ぬける」を「とおる」「すぎる」に替えても自然な文であるが、やはり「ぬける」が最適であろう。

2. 移動動詞について

本稿で取り上げる三語は、いずれも移動格の「ヲ」(cf. 奥津1967)を伴った名詞句(以下単に「ヲ格名詞句」と言う)と共に起る移動動詞である。このヲ格名詞句は、現象的には、「経路」「経由点」「起点」を示す。

- (4) 子供が 庭を 走り回る。(経路)

(5) 登山隊が その峠を 越える。(経由点)

(6) 列車が 駅を 出る。(起点)

成田1979では、本稿で取り上げる三語と共に、一つの類(第III類)にまとめ、[+経過性]という素性を与えている。

また、影山1980は、「とおる」「横切る」「渡る」と共起するヲ格名詞句は経路(影山1980の用語では「径路」)を示すとし、「通過動詞」と呼んでいる。ここで、「とおる」に関して言うと、成田1979と影山1980とは、共起するヲ格名詞句が経由点を示すとするか経路を示すとするかで異なっている(もっとも、影山1980の場合、経由点ではないという意味で、「径路」としているのかどうかは不明である)。

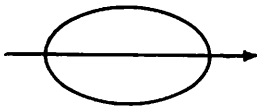
移動動詞と共に起るヲ格名詞句が経路、経由点、起点のいずれを示すかは、その動詞の意味と密接に関係していると考えられる。本稿では、この問題に焦点を当てて、分析を進めていきたい。

3. 従来の記述

3.1. 「とおる」

「とおる」は、過去、森田1977、柴田編1979で分析がなされている。まず、森田1977では、「とおる」は、「何か(A)がある領域(B)を経て一方から他方へと抜ける動作・作用(同上書、p.320)」を表わすと記述されている。ここでは、ある領域の外部から内部に入り、再び外部に出る(これを「通過」と呼ぶことにする)ということが主張されている。これは、図示すると次のようになる。

図1



ただし、森田1977は、「～をとおる」の場合を二つに分け、「通路の中での移動」と「経由点を通過する移動」があるとして、前者の例として(7)、後者の例として(8)を挙げている(p.321)。

(7) トンネルを とおる 貨物列車の音

(8) トンネルを とおって 新潟県に入る。

しかし、これは、「ある一定領域の中を経て向こうへ抜ける」という点では大差がない(同上書、p.321)としている。すなわち、やはり、ある領域の外に出ることが強調されている。

次に、柴田編1979であるが、これは、「通じる」と比較した分析であるので、次のような例が中心になっ

ている(用例は、同上書、p.122による)。

(9) A市から B市まで 鉄道が とおっている。

(10) A市から B市まで 鉄道が 通じている。
したがって、次のような本稿で中心的に取り上げるような例はあまり扱われていない。

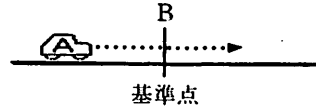
(11) バスが 駅前を とおる。

(cf. *バスが 駅前を 通じる。)

3.2. 「すぎる」

「すぎる」は、森田1977で分析されているが、「主体(A)と対象(B)との対応関係において、一方が他方に対し場所的、時間的、価値的にずれを生じ、差が生まれる。また、一方が移動し、経過して、その差が開いていく(p.236f.)」ことと記述されている。また、「主体Aと対象Bとの相対的關係だが、「過ぎる」には、そのどちらかが一方を基準(または標準)として他方を眺める意識がある(同上書、p.237)」とも述べられている。そして、具体的移動については、次のように図示されている(同上書、p.237)。

図2



3.3. 「ぬける」

「ぬける」は、国広編1982で、「くぐる」「もぐる」と共に分析されている。ただし、そこでは、「何かを通過して向う側に出る(同上書、p.13)」という意味を問題にするとされており、次のような例は扱われていない。

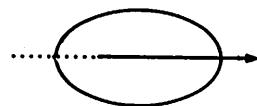
(12) 栓が ぬける。

(13) 空気が ぬける。

これは、「ぬける」が通過することを表わすということを主張しているものと解釈される^(注3)。その一方、国広編1982では、「ぬける」の三つの特徴の一つとして、「移動場所には限界があり、それを越えることに注意が向けられている(p.17)」というものが挙げられている。

この二つの記述から、「ぬける」は次のように図示できる。

図3



ここで、実線によって、「ぬける」は通過を表わすものの、内部から外部に出ることに「注意が向けられている」ことを示した。

4. 分析

4.1. 構文

2. で述べたように、「とおる」「すぎる」「ぬける」は、次のように、いずれもヲ格名詞句と共起し得る。

(14) 飛行機が この町の上空を とおる。

(15) バスが 交差点を すぎる。

(16) 列車が トンネルを ぬける。

この他、「ぬける」は、カラ格名詞句とも共起するようである。

(17) 飛行機が この町の上空から とおる。

(18) バスが 交差点から すぎる。

(19) 列車が トンネルから ぬける。

(19)は若干不自然かもしれないが、次のような文は自然であろう。

(20) ガスが ボンベから ぬける。

次にニ格名詞句であるが、「とおる」には次のような用法もある。

(21) 奥の間に とおる。

これについては、4.3.で述べる。また、「ぬける」もニ格名詞句と共起する。

(22) 裏道に ぬける。

4.2. ヲ格名詞句

4.2.1. 「とおる」と経路、経由点

3.1.でもみたように、従来、「とおる」は、ある領域に入り、さらにそこから出ることを表わすとされていた。確かに、次のような場合、常識的に、「橋」を通過することが表わされている。

(23) バスが 橋を とおる。

しかし、次のような場合、「山の手線」は「東京の区部」を通過しない。

(24) 山の手線は 東京の区部を とおる。

次の文も同様である。

(25) 地球は 太陽を一つの焦点とする楕円軌道を とおる。

(26) この地下鉄が 全線 地下を とおる。

また、次の文を比較してみたい。

(27) 車が 山道を とおると エンジンが煙を出し始めた。

(28) 車が 山道を すぎると エンジンが煙を出し始めた。

(29) 車が 山道を ぬけると エンジンが煙を出し始めた。

(27)は若干不自然であるが、^(註4)あえて解釈すると「エンジンが煙を出し始めた」のは「山道」の領域内である

のに対して、(28)(29)の場合、その領域を出てからである。さらに、次の例文を比較してみたい。

(30) 青函連絡船が 津軽海峡を とおる。

(31) 青函連絡船が 津軽海峡を すぎる。

(32) 飛行機が 津軽海峡の上空を とおる。

(33) 飛行機が 津軽海峡の上空を すぎる。

(30)(31)の状況は図4、(32)(33)の状況は図5のように図示されよう。

図4

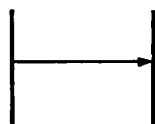
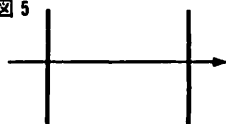


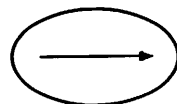
図5



後にみるように、「すぎる」のヲ格名詞句は経由点を示す。(31)の不適合性は、この状況で「津軽海峡」を経由点とみなせないことによると考えられる。それにもかかわらず、(30)が適格であるのは、「とおる」と共起するヲ格名詞句が必ずしも経由点を示していなくてもよいということの意味すると考えられよう。

このようにして、「とおる」の場合、通過することは必ずしも必要でなく、ヲ格名詞句は、経由点というより経路を示すと考えられる。これは、柴田編1979が、「とおる」と「通じる」を比較して、「両動詞ともに〈径路〉が関係しながらも、トオルの方は〈径路〉そのものに注意の焦点があつて〈出発点〉と〈到達点〉は問題になっていないのに対して、ツウジルの方は〈到達点〉に注意の焦点があることが分かる(p.124)」と述べていることと通ずるものであろう。したがって、「とおる」の表わす移動は、基本的には、次のように図示される。

図6



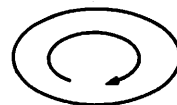
ただし、このような一般化には問題もある。まず、次の「とおる」と「走る」を比べてみたい。

(34) 校庭を とおる。

(35) 校庭を 走る。

(35)は、例えば図7のような領域内での移動でもかまわない。

図7



ところが、(34)は、このような状況では使えないようである。「校庭」を通過するというのが通常の解釈であ

ろう。ただし、(24)は図7のような状況と考えられ、これと対照的である。また、次の場合、(36)は、「家の前」を通過することを表わすが、(37)は、それと共に「家の前」の領域内での移動も表わす。

(36) トラックが 家の前を とおる。

(37) トラックが 家の前を 走る。

この問題については、4.4.で改めて考えることにする。

4.2.2. 「すぎる」「ぬける」と経由点、起点

成田1979では、「すぎる」「ぬける」と共起するヲ格名詞句は経由点を示すとされていた。また、国広編1982でも、「ぬける」は「通過」を表わすとされており、これはヲ格名詞句が経由点を示すということと解釈される。

しかし、これについて、次の文を比較されたい。

(38) 飛行機が A国の領空を すぎる。

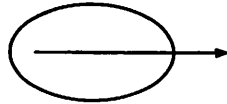
(39) 飛行機が A国の領空を ぬける。

(38)(39)のいずれの場合でも、「すぎ」た、あるいは「ぬけ」た後、「飛行機」が「A国の領空」にあつてはならないのは同じである。しかし、「すぎる」あるいは「ぬける」前の位置は別である。(38)の「すぎる」の場合、「飛行機」は「A国の領空」にあつてはならないが、(39)の「ぬける」の場合、「A国の領空」にあつてもかまわな^(註5)い。つまり、(38)(39)は、それぞれ次のように図示できる。

図8 (38)



図9 (39)



このことから、「すぎる」と共起するヲ格名詞句は経由点を示すが、「ぬける」と共起するヲ格名詞句は起点を示すということが言えそうである。

このことは、次のような現象によっても支持される。

(40) 人込みを ぬける。

(41)(?)人込みから ぬける。

(42) 裏道を ぬける。

(43)(?)裏道から ぬける。

このように、周道的ではあるが、「ぬける」の場合、「を」は「から」と交替し得る。また、これは、次のような具体的な移動ではない「ぬける」の用法にも現わ^(註6)れている。

(44) 加藤氏が 遠征隊のメンバーから ぬける。

この場合は、「遠征隊のメンバー」は起点としか考えられない。

ところが、「とおる」「すぎる」の場合、このような

ことはない。

(45) まわり道を とおる。

(46) *まわり道から とおる。

(47) 市街地を すぎる。

(48) *市街地から すぎる。

さらに、「ぬける」と共起するヲ格名詞句は起点を示すと考えると、国広編1982の「ヌケル場所は比較的長い(p.16)」ということも説明できる。つまり、「ヌケル場所」が短いと、その場所が起点ではなく経由点と解釈しやすくなってしまふからであろう。

4.3. ニ格名詞句、カラ格名詞句との共起

4.1.でも述べたように、「とおる」と「ぬける」は、ニ格名詞句とも共起し得る。

(49) 奥の間に とおる。

(50) 裏道に ぬける。

本節では、ニ格名詞句との共起の含意について検討したい。

まず、「とおる」の場合からみてみたい。ニ格名詞句との共起について、森田1977は、「経由意識が働いている(p.321)」と述べており、これを認めると、4.2.1.での主張と矛盾するようである。しかし、このような例は、「部屋」などをニ格にとる場合に限られているようであり、若干特殊な用法とみてよいのではないかと思われる。

(51) *車が 路地に とおる。

(52) *列車が 山梨県に とおる。

また、成田1979では、「登る」は「場所格」(これは、本稿の「経路」にほぼ相当する)を示すヲ格名詞句と共起するとされているが、ニ格名詞句とも共起し得る。

(53) 山道を 登る。

(54) 山頂に 登る。

ところが、この場合、ヲ格名詞句とニ格名詞句は共起し得ない。

(55) *山道を 山頂に 登る。

これと同様にして、「とおる」の場合も、ヲ格名詞句とニ格名詞句は共起し得ないようである。

(56) 廊下を とおる。

(57) 応接間に とおる。

(58) *廊下を 応接間に とおる。

したがって、「とおる」と「登る」は同じパターンを示すわけであるが、「登る」に「経由意識」があるとは言いがたい。

また、仮に、ニ格名詞句との共起が「経由意識」と関係するとすると、経由点を示すヲ格名詞句と共起す

る「すぎる」も二格名詞句と共起し得るはずであるが、事実には反する。

- (59) 交差点を すぎる。
- (60) 駅前¹に すぎる。
- (61) 交差点を 駅前¹に すぎる。
- (62) 国境を すぎる。
- (63) *A国に すぎる。
- (64) *国境を A国に すぎる。

また、次の「走る」が「経路意識」を持つとは考えられないだろう。^(注7)

- (65) 廊下を 走る。
- (66) 教室に 走る。
- (67) 廊下を 教室に 走る。

このような点から、「とおる」と二格名詞句との共起を「経路意識」と結びつけることは好ましくない。

次に、「ぬける」の場合をみてみたい。この場合には、「とおる」と異なり、ヲ格名詞句と二格名詞句とは共起し得る。

- (68) 国境を 横道に ぬける。
- (69) 清水トンネルを 新潟県に ぬける。

さらに、この例からわかるように、「とおる」の場合と異なり、「ぬける」は二格名詞句と自由に共起する。

しかし、これに関連して、4.2.2.の結論と食い違う現象もある。次の文のように、「ぬける」は、ヲ格名詞句、カラ格名詞句、二格名詞句の全てと共起することができる。

- (70) 清水トンネルを 群馬県から 新潟県に ぬける。

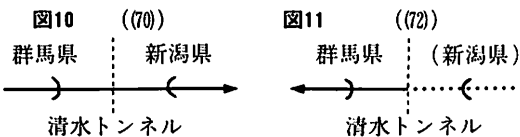
この場合、起点はカラ格名詞句によって示されているので、ヲ格名詞句は単純に起点を示すとは考えられない。したがって、この場合、ヲ格名詞句は、経路点を示しているとも考えられる。

ところが、二格名詞句が現われない場合、事情は複雑になる。

- (71)?? 清水トンネルを 群馬県から ぬける。

(71)は、(70)から二格名詞句を除いたものだが、かなり不自然になる。(71)は、(72)のように、「群馬県」を「群馬県側」とすると全く自然な文になるが、(72)は、(70)とは全く逆の状況を表わす。

- (72) 清水トンネルを 群馬県側から ぬける。



(72)は、次の(73)と同様な文と考えられる。

- (73) 大学を 通用門から 出る。

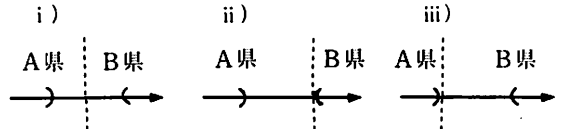
この場合、ヲ格名詞句もカラ格名詞句も共に起点を示しており、前者は言わば「広い起点」、後者は「狭い起点」と考えられる。あるいは、カラ格名詞句はむしろ経路点を示しているようにも思われる。これと同様なことが(72)についても言えるだろう。つまり、(72)でカラ格名詞句によって指示されているのは、「清水トンネル」内の「群馬県側」の領域なのである。このように考えると、(72)の場合は、ヲ格名詞句が起点を示すとしながら、カラ格名詞句とも共起することは問題とはならない。なお、(71)は、先のような解釈がしにくいので、不自然な文になると考えられる。

それでは、(70)はどのように解釈したらよいのであろうか。ここで、次のような架空の状況を考えてみたい。

- (74) トンネルを A県から B県に ぬける。

この文の状況としては、仮定的には、次の三通りが考えられる。

図10



しかし、(74)は、iii)のような状況では使えないだろう。iii)は、その他のものと、ヲ格名詞句によって指示される領域とカラ格名詞句によって指示される領域とが重なっていないという点で異なっている。

さて、このことから、(70)のような例も、(73)と同様に、カラ格名詞句は「狭い起点」を示していると考えられよう。と言うのも、図10のiii)の状況の場合、ヲ格名詞句によって指示される領域とカラ格名詞句によって指示される領域とが重なっていないので、カラ格名詞句を「狭い起点」とすることができず、(70)が使えないというように解釈できるからである。さらに、図10のi)のような状況でも、カラ格名詞句によって指示される領域は、「トンネル」の外部も含めた領域ではなく、「トンネル」の「A県」側の領域と考えられる。したがって、(70)の場合も、ヲ格名詞句もカラ格名詞句も起点を示していると考えられるのである。なお、ヲ格名詞句と二格名詞句とが共起することには全く問題がない。

4.4. 「とおる」と移動の方向性

「とおる」に関しては、影山1980で、移動の方向性の問題が取り上げられている。そこでは、経路が線的なものの場合と幅のあるものの場合とが分けられている。次に、影山1980の指摘をまとめて図示する。

図11 線的なものの場合

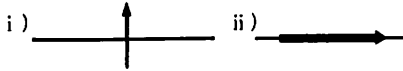
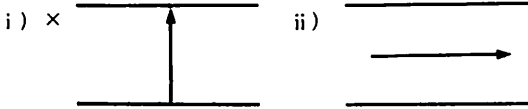


図12 幅のあるものの場合



このうち、幅のあるもの場合は、ひとまずは問題がないようである。^(注8)しかし、線的なもの場合には、疑わしい点もある。まず、次の文をみてみたい。

(75) ?列車が 国境を とおる。

この文は、「国境」と交差する形で移動を表わす場合、「国境」に「国境地帯」という読み込みをしないと、不自然であろう。これは、次の「すぎる」の場合と対照的である。

(76) 列車が 国境を すぎる。

「すぎる」の場合には、「国境地帯」という読み込みをしなくても、全く自然な文であろう。つまり、これは、「とおる」は、何かに交差する形で移動する場合、それにある程度幅がないといけないということではないだろうか。^(注9)

それでは、次のような文はどうであろうか。

(77) 彗星が 地球の軌道を とおる。

この場合、「彗星」の軌道が「地球の軌道」と単に交差するという状況では不自然であろう。自然な状況は、「彗星」が「地球の軌道」に沿って移動するというものである。したがって、次の文は不自然である。

(78) ?彗星が この地点で 地球の軌道を とおる。

しかし、(77)も(78)も、全く不適格であるわけではない。これについては、後に述べることにする。

以上のように考えると、「とおる」が図11のi)のような状況を表わすことができるとすることには問題があることになる。したがって、それが線的なものであれ幅のあるものであれ、ある領域に沿った移動しか「とおる」は表わさないということになる。ここで、次の文をみてみたい。

(79) 電車が 玉川を とおる。

この文が、「渡る」という意味で適格であるとする、^(注10)「玉川」を線的に把えるにしろ、幅のあるものと把えるにしろ、「玉川」に沿った移動ではない。しかし、この場合、「玉川」には「玉川にかかった橋」というような読み込みがあるようである。そのように考えると、(79)には問題はない。また、(75)の場合、「国境地帯」という読み込みがあるとしたが、それでも、図12のi)のような状況になる。しかし、これも、実は、「国境地帯」に

ある線路に沿っての移動が考えられていると言うことができよう。これは、(24)も同様である。

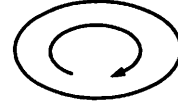
このことと関連して、次に、(34)(35)、(36)(37)で指摘した現象について考えてみたい。次に、(34)(35)を再掲する。

(80) 校庭を とおる。

(81) 校庭を 走る。

(81)は、次の図13(=図7)のような状況も表わすことができるが、(80)はそれができず、通過するというのが通常の解釈であろう。

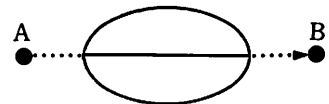
図13



これも、移動の方向性の問題と考えられる。

このことは、前にみた「とおる」がある領域に沿った移動を表わすということから説明できるだろう。図13のような状況は、ある領域に沿った移動とは考えられない。それでは、(80)には、なぜ通過の解釈がでるのであろうか。これは、「校庭」のような言わば方向性のない領域の場合、「に沿った」という特徴をあてはめようがないからではないだろうか。そして、その領域の外部の一点から一点への移動ということで、擬似的に方向性が生み出されるのではないだろうか。つまり、ある領域の中で、その外部にある二点の間を結ぶ経路ということである。

図14



そして、この外部の二点の存在から、通過という解釈が生じてくるのである。

では、以上と同様に、(36)(37)も説明できるであろうか。次に、(36)(37)を再掲する。

(82) トラックが 家の前を とおる。

(83) トラックが 家の前を 走る。

この場合も、(82)が、(83)と異なり、図13のような移動を表わさないことは、ある領域に沿っての移動ということから説明できる。しかし、(82)の場合、「家の前」は、広さのあるものとしてより、点的なものとして把えられているようである。次の文は、これが一層はっきりしているだろう。

(84) 部隊が A地点を とおる。

これらは、現象的には、これまでみてきたものと異なり、次のように図示される。

図15



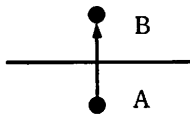
また、次の文は、これが繰り返されたものである。

(85) このバスが 五つの停留所を とおる。

これらの場合、ヲ格名詞句によって指示される領域が点的であるので、その領域に沿った移動ということは考えられない。このことから、先と同じように、外部の二点が想定され、擬似的な方向性が生み出され、経由点の解釈が生じると考えられる^(注11)。

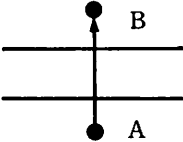
ところで、ここで、(77)(78)の問題に帰りたい。これは、線的なものと交差する形での移動であった。仮に、先に述べたように、「とおる」がある領域に沿った移動を表わすとすると、これは全く不適格になるはずであるが、実際は、それほど不適格性が高くない。これも、外部の二点が想定され、経由点の解釈が生じるためとは考えられないだろうか。つまり、次のように図示されるような状況を考えるのである。

図16



ところで、このことから、幅のあるものの場合も、これと同じことが起こることが予測される。

図17



それでは、次のような文はどうであろうか。

(86) 生徒達が 国道を とおる。

ここで、通学路が「国道」を横切っているような状況を考えてみたい。この場合でも、(86)は適格な文であろう。次のような文にすると、この状況ははっきりする。

(87) その学校の生徒達は 国道を とおって 学校に行く。

そして、この場合にも、経由点の解釈が生じる。

以上のように、「とおる」は、一次的には、ある領域に沿った（そしてその領域内の）移動を表わすが、その領域に方向性がない場合、あるいは、方向性があったとしても、その方向性に従わずに移動する場合、その領域の外部の二点が想定され、そのことにより、擬似的な方向性が生み出され、経由点の解釈が生じるというように考えることができる。これまで、「経路」という術語を未定義のまま用いてきたが、ここで、「経路」とは、<ある領域に沿った移動がある場合のその領域>のこと

であるとしよう^(注12)。そして、「とおる」は経路を要求し、一次的には、それはヲ格名詞句として具現するが、ヲ格名詞句自体を経路として把えることができない場合、表面上、ヲ格名詞句は経由点として機能するが、そこにはやはり経路が想定されているということになる^(注13)。

このように考えると、影山1980の観察は、それ自体では不十分であったことになる。なお、これには、影山1980の「特定項目優先の条件」との関連という理論的な含意があるが、本稿では、これにはふれないことにする。

5. その他の問題

以上の考察では、専ら、「とおる」「すぎる」「ぬける」と共起するヲ格名詞句によって指示される領域の特徴についてみてきた。しかし、これは、厳密には、その領域と動詞の表わす移動との関わりの問題であり、その点で、動詞自体の特徴とも言える。しかし、三語には、これとは別の特徴ももちろん存在し得る。

「とおる」「すぎる」に関しては、従来の記述においてもそうであったように、本稿で検討したような特徴、つまり移動の領域と関わる特徴以外のものは特に必要ないようである。ただし、「とおる」に関しては、後にふれるような用法についての言及が必要であろう。

「ぬける」に関しては、国広編1982で、「移動主体の周辺には何かが迫っている (p.17)」ということが挙げられている。これに関しては、国広編1982でなされているように、「くぐる」との比較も必要であろう。

また、本稿では、「とおる」「すぎる」「ぬける」の全ての用法を網羅したわけではない。例えば、次のような抽象的な用法については、ほとんどふれなかった。

(88) 議案が とおる。

(89) 長い冬が すぎる。

(90) 山田氏が 役員から ぬける。

ただし、このようなものは、本稿でみたような具体的な用法に準じて考えられるであろう。しかし、「とおる」の次のような用法には何らかの言及が必要であろう。

(91) この道は 海沿いを とおっている。

この場合、「この道」は、「移動するものではなく、細長い形で静止しているものである (柴田編1979, p.123)」。また、「とおる」には、次のような状態性動詞としての用法もある^(注14)。

(92) 意味が とおる。

しかしながら、これらは、少なくとも、本稿の分析を覆すものではないと推測される。そのため、本稿では、これらは open questions としておきたい。

6. おわりに

まず、次に、本稿の分析をまとめておく。

•「とおる」

NP₁ ガ NP₂ ヲ _____

〈NP₁ によって指示されるものが、NP₂ によって指示される領域に沿って移動する〉

注：これは、NP₂ によって指示される領域に方向性を認めることである。その領域に方向性が認められない場合、あるいはその方向性に従わずに移動する場合、領域外部の二点の存在が想定され、それによって擬似的な方向性が生み出される。そして、この領域外部の二点の存在によって、その領域は経路点と解釈される。

•「すぎる」

NP₁ カ NP₂ ヲ _____

〈NP₁ によって指示されるものが、NP₂ によって指示される領域の外部から内部に移動し、再びその外部に移動する〉

•「ぬける」

NP₁ ガ NP₂ ヲ (NP₃ カラ) (NP₄ ニ) _____

〈NP₁ によって指示されるものが、NP₂ によって指示される領域の内部から (NP₄ によって指示される) 外部に移動する〉

注：「NP₃ カラ」が現われる場合、NP₃ によって指示される領域は、NP₂ によって指示される領域に含まれる。つまり、NP₂ は「広い起点」、NP₃ は「狭い起点」として機能する。

さて、本稿の議論から明らかであるように、成田1979のように、「とおる」「すぎる」「ぬける」の三語を移動動詞の同じ類(第Ⅲ類)に入れることは妥当ではない。「すぎる」は確かに第Ⅲ類であるが、「とおる」は、「回る」「登る」などと共に第Ⅱ類に、「ぬける」は、「出る」「離れる」などと共に第Ⅳ類に入れるべきであろう。なお、成田1979では、第Ⅱ類は「場所格」(本稿の経路にほぼ相当する)を、第Ⅳ類は「源泉格」(本稿の起点に相当する)をとるとされている。

最後に、1.でふれた(1)(2)(3)の表現効果の違いについて述べておきたい。次に、(1)(2)(3)を再掲する。

(93) 国境の長いトンネルを とおると 雪国だった。

(94) 国境の長いトンネルを すぎると 雪国だった。

(95) 国境の長いトンネルを ぬけると 雪国だった。

まず、(93)では、「雪国だった」と気づくのは、通常、

「国境の長いトンネル」の中でのことである(ただし、これは状況としては不自然である)。これは、「トンネル」に方向性があり、この場合、その方向性に従った移動であるので、ヲ格名詞句は、通常、経路として機能するからである。一方、(94)(95)の場合、^(注15)「雪国だった」と気づくのは、「国境の長いトンネル」の外でのことである。これは、「すぎる」も「ぬける」も、その領域の外部に出ることを表わすからである。その点においては、(94)(95)も同じである。しかし、(94)よりも(95)の方が描写としてよいと感じられる。これは、「すぎる」の場合、領域の外部から内部へ、そして再び外部へと移動することを表わすことから、明・暗・明という冗長な場面の転換になるのに対して、「ぬける」の場合、領域の内部から外部へ移動することしか表わさないことから、暗・明という際立った場面の転換になるからであろう。

〈注1〉 ただし、(1)は、6.で述べるように、状況としては不自然であろう。

〈注2〉 これは、三種類の移動格の「ヲ」が存在すると主張するものではない。

〈注3〉 ただし、国広編1982が、どの程度厳密に「通過」という概念を用いているかは問題である。

〈注4〉 これは、「エンジンが煙を出し始めた」時点が特定できないためと考えられる。

〈注5〉 (9)の場合も、図8のような状況は可能であろうが、これは、記述上は必要ないと考えられる。

〈注6〉 (4)の場合、かえって、「を」は不自然なようである。

i) ?加藤氏が 遠征隊のメンバーを ぬける。

〈注7〉 「走る」は、成田1979では、「登る」と類は異なるが、同じく「場所格」のヲ格名詞句と共に起するとされている。

〈注8〉 ただし、これについては、後に表面上の反例を示す(86)(87)。

〈注9〉 このように考えると、図12のi)の状況を不適格とすることへの反例ともみなせる。

〈注10〉 ただし、後にみる点の通過は除く。

〈注11〉 これと同様なことが、「回る」の場合にも起こる(cf. 杉本1979)。

i) 人工衛生が 軌道を 回る。(経路)

ii) 社員が 得意先を 回る。(経路点)

〈注12〉 このように定義すると、図7のような状況での(3)のヲ格名詞句は「経路」を示しているの

ではないことになる。

<注13> このことは、実際にヲ格名詞句として具現したものの機能と動詞が要求する機能とが異なることがあるということを含意する。

<注14> cf. 久野1973。

<注15> (93)は、「国境の長いトンネル」を経由点と

して解釈することも弱いながらもできそうである。

言語経歴：1958年11月 東京都豊島区生 3
歳～ 埼玉県朝霞市
(東京都立大学大学院学生)

のぞく(覗)・うかがう

大島 資生

1. はじめに

(1) 敵の様子を のぞく。

(2) 敵の様子を うかがう。

「のぞく」と「うかがう」という動詞は、どちらも「ひそかに見る」という意味をもっている。本稿では、この「ひそかに見る」という意味を中心として、両者の違いを探ってみようと思う。

なお、「のぞく」には「えりから下着がのぞいている」といった自動詞としての用法もあるが、ここでは他動詞としての用法にかぎって分析をすすめる。

2. 辞書の記述

「のぞく」 ①間を隔てる障害をとりのけて見る。かいまみる。様子をうかがう。②わずかに一部分だけを見る、または知る。③高い所からからだをのりだして見おろす。

「うかがう」 ①のぞいて様子を見る。そっと様子をさぐる。②ひそかにつけ入るすきをねらう。時期の到来を待ち受ける。③手がかりを求めて調べる。④いちおう心得ておく。(『広辞苑第三版』)

「のぞく」 ①すきまや穴を通して向こうを見る。②ひそかに様子を見る。うかがい見る。また、他人の隠し事や秘密などをそっと見る。③ちょっと見る。ざっと見る。ちょっと立ち寄って見る。④身をのりだして低い所を見る。見おろす。また、首をのばすようにしてそれを見る。

「うかがう」 ①物のすきまなどから、そっと様子をのぞき見る。また、それとなく様子をさぐる。②ひそかによい機会の来るのを待つ。③調べ求める。調べ捜す。④物事の

一端を知る。一応様子を見る。(『国語大辞典』)

両者の記述についての細かいコメントは、分析の中で適宜述べるが、二つの辞書で見比べてみても、二語の決定的な違いは見出せないようである。また、他辞書についても、ほぼ同様の記述であった。

3. 分析

3.1. 主体

(3) スパイが 敵陣の様子を のぞく。

(4) スパイが 敵陣の様子を うかがう。

(5) *望遠鏡が 敵陣の様子を のぞく。

(6) *望遠鏡が 敵陣の様子を うかがう。

(5)(6)は比喩的用法以外では不適格である。したがって、一般の用法において主体はどちらも有生物にかぎられるようだ。

3.2. 対象

(7) ドアのすきまから 彼の部屋を のぞく。

(8) ?ドアのすきまから 彼の部屋を うかがう。

(9) ドアのすきまから 彼の部屋の様子を のぞく。

(10) ドアのすきまから 彼の部屋の様子を うかがう。

(11) 窓を のぞく。

(12) *窓を うかがう。

(13) 窓の奥を のぞく。

(14) 窓の奥を うかがう。

(15) 望遠鏡を のぞく。

(16) *望遠鏡を うかがう。

(17) 望遠鏡で 敵陣を のぞく。

(18) 望遠鏡で 敵陣を うかがう。